

自給的暮らしをしながら植物の絵を描いている

大森 梨紗子 さん



山の一家*葉根舎 www.yamano-haneya.com/
RISAKO OMORI www.risakoomori.com/

❁ 無農薬無肥料で畑や田んぼをやり自給的暮らしをしながら、絵を描いてくらしたいという若いころからの夢を叶えている大森梨紗子さんたちにお話しを聞くため、桜の咲く季節、兵庫県和田山町の山里にある家を訪ねた。
❁ 急傾斜の崖の上に建つ家は、引退した大工さんと一緒に自分達で建てたもの。材木や壁土は解体屋さんを手伝い、頂いたものを使ったそうだ。薪ストーブとペアガラスの窓がある部屋は暖かくて上着をぬいだほど。ベランダに出ると、知り合いにもらった原種の桜がちょうど目の下に咲いていた。
❁ コロナで世界が一変し、自給自足とアートの暮らしが当たり前になる時代を先取りしてそうな、夢のような素敵な暮らしを見せてもらった。(あ)

梨紗子さんのパートナーのげんさんは近くにある「あーす農場」の次男。子どものころから自給自足の暮らしを実践していた農場で炭焼きをし、動物を飼い、パンを焼き、敷地を流れる小川では小水力発電をやるなど様々な自給的な「百」姓仕事を体験した。そして今もミツバチを飼ってハチミツをとったり、薪の窯で天然酵母のパンを焼いている。また友だちを通じて炭素循環法という無肥料の農法を知り、この土地で循環できるようにアレンジして田畑をやっている。その年の気候に合わせて代掻きの時期を工夫すると田んぼに草が生えないそうだ。田んぼの泥の具合を見て判断するという。マニュアルに従うのではなく、自分の感覚をとぎすまし、まわりの環境をすべて感じとりながら具体的な作業を進めて結果が出るもので、「ふつうの農業とは真逆のことをしてるんです」とげんさんは楽しそうに話す。

味噌は毎年つくり、時には醤油も。買うのは昆布など海のもの、スパイス類、パンの材料のレーズンなど。魚はお父さんの代から日本海の魚屋さんで物々交換してるといふ。気が向いた時にパンや野菜を送ると、向こうも気が向いた時に魚とか冬はカニなども送ってくる。肉は猟師さんから鹿肉ももらったり、たまに買うこともあるそうだ。

現在は9軒となったこの地区では山から水をひいて使っており、その特設水道は部落で管理している。すでに建設してから40年がたつので修理が必要な時期を迎えているそうだが、地区で一番若いげんさんが区長となって役場との交渉に当たり、補助金を引き出すなど地域のために立ち働いている。その他にも消防団や農事部長など様々な地区の役を任されており、日常的に細々とやる事が多く、勤めていたらできない仕事だといふ。自分の家族だけでなくまわりの人達もささえる柱となっており、頼りにされてるのだから。

梨紗子さんは美術系の大学に行ってる時から、大学を出たら海外を含めいろんなところに行ってみたいと思っていたそうだが、大学生の休みのときにげんさんと知り合い、あーす農場に興味を持って卒業後1年間百姓体験を

するために住み始めた。そしていっしょに家を作ってみようという話しになり、げんさんと結婚してここに住み着くことになった。

大学を出てからも絵を描いて暮らしたいと思っていたというが、山に暮らし3人の男の子を育てながらもその夢を実現させているわけだ。つい先日大阪と福知山で展示会を開き、またそんな時には頼まれて生き方や暮らしぶりについてのお話を開いたり、野草料理や草木染め教室を開くこともあるそうだ。311のあと、若杉友子さんの料理教室を手伝うようになり、そこでしっかり野草料理を学んだという。



梨紗子 ● 大学生の頃、興味のないバイトをしながら絵を制作していくのは違和感があり、いいアンテナをはって毎日を過ごしていたら、これだと思えるものが見つかるだろうと思

っていた時に大森家に出会ったんです。自分の体の細胞が喜ぶ感覚があり、こういう暮らしをしながら制作するのが自分にとって一番矛盾がないという感覚だけで飛び込んできました。

ほんとに自分がやることは絵なのかなと思うこともあって、たとえば草木染めの服をつくったりするのも好きで、人が使うものは喜んでくれるという実感もわきやすいし、無駄なものを作ってる感覚になりにくいから、実用品っていいなと思う。でもやっぱり絵を描きたいというところに戻ってきてしまう。人が生まれてきて何が大事かという、命を全うするということが一番大切なことなのかなと思っていて、私はこの命を全うするには絵を描くしかないという感覚がある。(笑) 古い壁画や縄文土器みたいにモノをつくる行為って…縄文土器は用途もあるけど不要な模様が入っているでしょう。こういう暮らしをしているせいもあって、そういう部分とつながるような気がしてます。

絵を描いていると、人に認められたいっていう欲もわいてきてしまうけど、そこに引張られると違和感が増えてきて、けっきょく毎日暮らしているって思ってること、すべての子ども達が笑顔で元気で暮らしていくことだったり、豊かな自然が守られていくことだったり、そういう思いや祈りを



絵に込めて描くというのがしっくりする。それが絵を描く根源的な祈りにつながるような感覚で、そういう思いを大事にして、この暮らしだからこそ描けるものを描いていきたいと思っています。

—— 絵だけでなく、草木染めにしても野草料理にしても、植物が変わらぬテーマなんですね。

● そう。長男のつくしが生まれた時はつくしばっかり描いてたんです。人を描いてるとある程度形が制限されてしまって、植物の方が自由に描けるのと、ふだんほんとに家族以外会わないので、植物と遊んでもらってる、植物が友達みたいな、植物に囲まれて暮らしていて、食事にしろ手当にしろ植物に助けられていて、食べてるから体も植物でできてるし、(笑) 植物を通して感じていることを描けるんじゃないかなと。

雨が降ってるときに海の中にあるような感覚がするんです。水って記憶するっていうでしょ。それは雨の中に海の中に居た頃の記憶が入ってるのかな、光には宇宙の記憶があるのかなと思うと、私がいつも植物を描いていると、植物の中にも光や雨が降り注いで吸収されてるから、そこにもそういう記憶が入ってると思うし、春になってオオイヌノフグリとかちっちゃい花がぱっと咲いている様子は宇宙の星のように見えて、ここに暮らしてるだけでどこにでもつながれるような感覚がある。草を摘んでいて昔の人も摘んでたのかなと思うと、時間を越えてつながるような感じが生まれやすくて、あちこち行かなくても、ここにどどん根ざすほどに世界が広がる感覚がある。足元の植物を描きながらも宇宙の星のようだったり、一枚の葉っぱが光や水やいろんなものに変容したり見えるような絵にしていきたいなと思っています。

← 入り口から入っていくと左手に桜が咲いていて、右手前にギャラリー、その奥に母屋がある。

↑ アトリエで絵を描く梨紗子さん。

↑ 息子達もお手伝い。家族で薪割り。

↑ 右がげんさん。左は自宅出産で生まれた三男のかやくん。

